

敦煌文書と日本のかかわり

—敦煌写本「孔子項託相問書」と『今昔物語集』—

伊藤 美重子

はじめに

20世紀の初頭、中国甘肅省敦煌県の莫高窟のある小さな石室（即ち、敦煌文物研究所編号の第17号窟）からおびただしい数の古文献群が、その当時、莫高窟に住み着いていた道士によって偶然発見された。これが、世にいう敦煌文書である。敦煌文書は5世紀から11世紀までの写本を主とし、その多くが漢文文献であり、仏教文献が大半を占めている。またそのほかにも、儒家經典、歴史書、文学作品、占い・暦などの実用書、戸籍・帳簿・回覧板などの社会・経済文書などもあり、極めて多様で豊富な内容を含んでいる。

敦煌文書はほとんど中央では残り得なかった当時の人々の生活の一こまを垣間見る資料を豊富に含んでいるという点で、極めて貴重で重要な資料であるといえる。

非常に興味深いことは、敦煌文書に含まれるいくつかの文献は、日本にも伝えられていたことが確認できる。筆者は、昨年1月に北京日本学研究中心において、「敦煌文書と日本のかかわり—敦煌写本『雑抄』を例として」という題目で報告をし、当時の学校教材として用いられていたと推定される「雑抄」と題する文献には、書物の名と撰者名・注釈名を羅列した部分があり、そこに並べられた書が、平安貴族の藤原佐世（？-897）の『日本国見在書目録』にすべて著録されていることを確認した。そして、その中に名を連ねる「文場秀句」、「典言」、「兔園策」、「開蒙要訓」、李暹注の「千字文」の五つの文献は中央ではすでに失われた文献であるが、「典言」はその残巻が吐魯番文書に、「兔園策」「開蒙要訓」は敦煌写本にのこり、李暹注「千字文」に近い鈔本が日本に現存する。残存する鈔本や歴史書、書目などの記述から考えると、これらの五つの書物の性格は、中国中央の士大夫にとっては通俗的な書籍であり、初学者のためのいわゆる「童蒙書」の類に属するものであることを指摘した。そして、平安の貴族にとってこのような童蒙書類は理解しやすい簡便な漢籍として受容されていたのではないかと推測した¹。

敦煌文書にのこる文献が日本に受容されていたと考

えられる例は、このほかにもいくつかみられる。今回は『今昔物語集』巻十震旦部にみえる孔子にまつわる説話と敦煌写本「孔子項託相問書」との関連について紹介したい。

『今昔物語集』震旦部の説話—孔子と童子

『今昔物語集』は平安時代後期に成立した説話集で、1040の説話が天竺（インド）、震旦（中国）、本朝仏法、本朝世俗の四部に分類収録されている。『今昔物語集』震旦部に収録される説話は中国の説話によるもので、ほとんどの説話はいささかの變形はともなうものその淵源となる中国の説話にたどりつくことができる。

巻十の震旦部に収録される「臣下孔子道行値童子問申語（臣下孔子、道に行きあえる童子の問いもうせること）第九」と題する一連の説話の中に、敦煌文書にしかみられない内容の説話が含まれることは早くから知られている²。

まず『今昔物語集』震旦部「臣下孔子道行値童子問申語第九」の冒頭は次のように始まる³。

今昔（いまはむかし）、震旦の周の代に、魯の孔丘と云う人ありけり。父は叔梁と云う。母は顔の氏なり。この孔丘を世に孔子と云う、これなり。身の長九尺六寸なり。心賢くして悟り深し。

幼稚の時には老子に随いて文籍を習うに、悟りえずということなし。長大ののちには、身の才広くして、弟子、その数多し。しかれば、公に仕えては政をただし、私に行きては人を教う。すべて事として愚かならず。これによりて、国の人、皆、首（こうべ）を低（かたむ）け貴ぶこと限りなし。

孔子を紹介し、孔子が優れた人物でありとても尊敬されていたことを最初に記述する。そして次に、孔子が行く道で出会った童子との対話がいづつか並べられる。それらの孔子と童子の対話は、孔子より童子のほうが勝っているという印象をあたえる逸話がならび、童子の返答の見事さに焦点をあてた書き方がなされている。

孔子の師は七歳の子供－「項橐生七歳而為孔子師」

中国では古来より孔子の先生が項橐（あるいは「項託」に作る）という七歳の子供であったという言い伝えがあり、古くは『戦国策』巻7「秦策第五」に秦の文信侯（呂不韋）と文信侯に仕えていた甘羅という若者の会話の中に次のような記述がみえる。

甘羅曰、「臣行之」。文信侯叱去曰、「我自行之而不肯、汝安能行之」。甘羅曰、「夫項橐生七歳而為孔子師、今臣生十二歳于茲矣。君其試臣、奚以遽言叱也」。

（甘羅が「臣（わたくし）が（張唐を）行かせるようにしましょう」というと、文信侯はこれを叱って「私でもできないことを、おまえがどうしてできようか」といった。甘羅は「項橐は七歳で孔子の先生となりましたが、今わたくしは十二歳です。君は臣をお試しにならなでどうしてお叱りになるのですか」といった。）

このほか『史記』巻71「樗里子甘茂列伝」に「大項橐生七歳為孔子師（大項橐は七歳で孔子の師となる）」、『淮南子』巻19「修務訓」に「夫項託七歳為孔子師、孔子有以聽其言也（それ項託七歳で孔子の師となり、孔子はその言に従っていた）」とあり、孔子の先生は七歳の子供であるという伝承が広く伝わっていたことがわかる⁴。

孔子と項橐の間にどのような対話がおこなわれていたかを伝える記述は少なく、『列子』湯問の逸話がよく知られるものである。

孔子東游。見兩小兒弁鬪、問其故。一兒曰、「我以日始出時、去人近、而日中時遠也。」一兒以日初出遠、而日中時近也。一兒曰、「日初出、大如車蓋。及日中、則如盤盂。此不為遠者小、而近者大乎」。一兒曰、「日初出、滄滄涼涼。及其日中、如探湯。此不為近者熱、而遠者涼乎」。孔子不能決也。兩小兒笑曰、「孰為汝多知乎」。

（孔子が東方に旅をしたときのこと。二人の子供が言い争いをしているのを見かけ、そのわけを尋ねた。一人の子供がいう「日の出の時に太陽が一番近づき、真昼には一番遠ざかると思う」と。もう一人は、日の出が一番遠ざかり、真昼になると近づくと。最初の子は「日の出には、太陽の大きさが車蓋（車の上に立てて車を覆う大きな傘）ぐらいになり、真昼には盤盂（おさら）ほどになる。これは遠ければ小さく、近ければ大きいということではないか」という。もう一人は「日の出は、冷え冷えとしているけれど、真昼はお湯につかったように熱くなる。これは近づけば熱く、遠ければ涼しいという

ことではないか」という。孔子は、どちらが正しいか決めることができなかった。二人の子供は笑って「あなたが物知りだなんて誰がいったのでしょうか」と。）

この『列子』の逸話が「臣下孔子道行値童子問申語第九」第五段にそのままみえ、次のようにある。

また、孔子、道を行き給うに、七八歳ばかりの二人の童、道に値（あ）いぬ。共子（「くじ」と読み、「孔子」の当て字）に問いて云（いわ）く、一人の童の云く、「日の始めて出づる時は日近し。日中に至りては日遠し」と。一人の童の云く、「日の始めて出づる時は日遠し。日中に至りては日近し」と。先の童、また返えて云く、「日の出づる時は熱くして、湯を探るが如し。日中に至りぬれば涼し」と。後の童、また返して云く、「日の出づる時は涼し。日中に至りぬれば熱くして、湯を探るが如し。豈に、日の出づる時は近く、日中を遠しと云わんや」と。かくのごとく二人して諍いて、問うと云えども、孔子裁（ことわ）り給うことあたわず。

その時に、二人の小兒わらいて云く、「孔子は悟り広くして、知らぬこと（ましま）さずとこそ知り奉るに、極めて悚（おろか）にこそ在（ましま）しけれ」と。孔子、これを聞き給いて、この二人の童を感じて、「只者には非（あら）ぬ者なりけり」となん讚め給いける。昔は小兒もかくの如き賢りけるなり。

これは太陽が近いのは日の出か正午かという争いをして二人の童子に出会い、孔子はそのどちらが正しいかがわからず、子供に馬鹿にされる話である。『列子』の太陽の大小を喩えた「車蓋（車の上にたてて車を覆う大きな傘）」と「盤盂（お皿）」の語は見えないものの内容はほとんど同じであり、この段は『列子』によることが明らかである。

『今昔物語集』「臣下孔子道行値童子問申語第九」にみえる孔子と童子のやりとりは、このような伝承を背景にもつものである。

敦煌写本「孔子項託相問書」にみえる問答と『今昔物語集』での問答の類似

敦煌文書のなかに孔子とその師とされる項託との問答を描く、その名も「孔子項託相問書」と題する通俗文学作品が存在している⁵。

『今昔物語集』の「臣下孔子道行値童子問申語第九」の第三段と第四段の孔子と童子の問答は、中国中央の文献にはみえず、かえって辺境の地の敦煌から発見されたこの「孔子項託相問書」の中にみえるのである。

「孔子項託相問書」はそのタイトルに示されるとおり、孔子と項託という子供の問答からなり、問答部は内容のまとまりにより十二段に分けられ、問答部の後に七言句からなるやや長い（全部で56句）韻文が付されている。この第一段第二段及び第四段の問答が『今昔物語集』に見えるものに酷似している。

まず、「孔子項託相問書」の冒頭部の第一段と第二段をあげる⁶。

昔者夫子東遊、行至荊山之下、路逢三箇小兒。二小兒作戲、一小兒不作喜（戲）。夫子怪而問曰、「何不戲乎」。小兒答曰、「大戲相煞、小戲相傷、戲而無功、衣破裏空。相隨擲石、不如歸春。上至父母、下及兄弟、只欲不報、恐受無礼。善思此事、是以不戲、何謂怪乎」。

（昔、孔子は東遊し、荊山のふもとに到った時、路に三人の子供に出会う。二人は遊び、一人は遊ばず。夫子それを怪しんで問う「なぜおまえは遊ばぬのか」と。その子は答えていう「大いに遊ぶと殺し合い、すこしの遊びも傷つけ合う。遊んだところで無駄なこと、服も破れ中身もからっぽ。皆で石投げするよりも、家に帰って白づこう。上は父母から、下は兄弟まで、その恩に報いずに、無礼となるのを恐れます。よくその事を思うがゆえに、遊ばないのです。なんの怪しむことがありましようか」と。）

項託有時、当道擁土作城、在內而坐。夫子語小兒曰、「何不避車」。小兒答曰、「昔聞聖人有言、上知天文、下知地理、中知人情。從昔至今、只聞車避城、豈聞城避車」。夫子當時無言而對、遂乃車避城下道。遣人往問、「此是誰家小兒、何姓何名」。小兒答曰、「姓名託」。

（項託はその時、道をふさいで土を運んでは城を作り、その中に座っていた。夫子が子供に言うことに「なぜ車を避けぬのか」と。子供は答えて言うことに「かねてより耳にするは、聖人の上は天文、下は地理、中は人情を知るとの言葉。昔より今に到るまで、車が城を避けると聞くが、城が車を避けると聞かぬ」と。夫子はその時、返す言葉もなくなって、とうとう車に城を避けさせ道をよけた。人をやって尋ねるに「これはどこの子供やら。姓は何、名は何という」と。子供は答えて言うことに「姓は項、名は託」と。）

孔子が東方に旅する道中で三人の子供にあい、一人の遊んでいない子供の言葉にいいまかされるという話から「孔子項託相問書」は始まる。その子供が項託であることが次の段で示され項託が作った土の城を孔子の車が避けざるを得なかったことが記されるのであ

る。

この段の内容に類似するのが『今昔物語集』「臣下孔子道行童子問申語第九」第三段の話である。その部分を引用する。

しかる間、孔子、車に乗りて道を行き給うに、その道に七歳ばかりの童三人ありて戯れ遊ぶ。その中に一人の童戯れ遊ばずして、道に当りて土を以て城の形を造れり。その時に、孔子、その側に來たり給いて、童に語りて云わく、「汝等、速やかに道を避けて我が車を過ぐすべし」と。童わらいて云わく、「いまだ聞かず、車を避くる城をば。但し、城を去くる車をば聞く」と。しかれば、孔子、車を去けて、城の外より過ぎ給いぬ。

そこには、三人の子供の中に一人の遊んでいない子供が道に土の城を作り、その城を孔子の車が避けて通った話がみえる。これに続けて第四段では、次のようにある。

孔子、童に問いて云く、「汝が姓名いかにぞ」と。童答えて云く、「姓は長なり。われ、年八歳なるが故に字（あざな）無きなり」と。孔子の云く、「なんじ、知れりや。何れの樹（うえき）にか枝無き。何れの牛にか犢（こうし）無き。何れの馬にか駒無き。何れの夫にか婦無き。何れの女にか夫無き。何れの山にか石無き。何れの水にか魚無き。何れの人にか字無きや」と。童答えて云く、「枯木には枝無し。土牛には犢無し。木馬には駒無し。仙人には婦無し。玉女には夫無し。大山には石無し。井の水には魚無し。空城には吏無し。小児には字無し」と。孔子、此れを聞て、「此の童、只の者には非ざりけり」と思いて、過ぎ給いぬ。

孔子は子供の名を問うのは、先に引用した「孔子項託相問書」と同じ趣向である。ただ、『今昔物語集』では、名は「長」であり、七歳ではなく、八歳になっている。この第四段では、孔子が矢継ぎ早に出す問いに、子供がこともなげに易々と答える様子が描き出されている。問いは「樹と枝、牛と犢、馬と駒、夫と婦、女と夫、山と石、水と魚、城と吏（孔子の問いにはないが、童の答えにみえる）、人と字」の九つの項目に関するものである。

この部分も「孔子項託相問書」の第四段に同様の部分があり、次に引用する。

夫子問小兒曰、「汝知何山無石、何水無魚、何門無関、何車無輪、何牛無犢、何馬無駒、何刀無環、何火無煙、何人無婦、何女無夫、何日不足、何日有餘、何雄無雌、何樹無枝、何城無使、何人無字」。

小兒答曰、「土山無石、井水無魚、空門無関、舉

車無輪、泥牛無犢、木馬無駒、斫刀無環、螢火無煙、仙人無婦、玉女無夫。冬日不足、夏日有餘。孤雄無雌、枯樹無枝。空城無使、小兒無字。

(夫子は子供に尋ねていうことに、「お前は知るや、どの山に石がなく、どの河に魚がなく、どの車に輪がなく、どの門に関(かんぬき)がなく、どの牛に犢(こうし)がなく、どの馬に駒(こうま)がなく、どの刀に環(つば)がなく、どの火に煙がなく、どの人に婦(つま)がなく、どの女に夫がないか。どの日が足りず、どの日が余り、どの雄に雌がなく、どの樹に枝がなく、どの城に使いがなく、どの人に字(あざな)がないか」と。

子供は答えていうことに、「土の山には石がなく、井戸の水には魚はおらず、空門(仏門の意)には関がなく、擧車(こし)に車輪はなく、泥の牛には犢がなく、木の馬に駒はなく、斫刀(なた)には環がなく、螢の火には煙がなく、仙人には婦がなく、玉女には夫はいない。冬の日は足りず、夏の日はあまり、孤雄には雌がなく、枯れ樹には枝はなく、空城には使いはおらず、子供には字はありません」と。

「孔子項託相問書」での問いは16項目あり、「門と関、車と輪、刀と環、火と煙、日の不足、日の余、雄と雌」に関する7項目の問いは『今昔物語集』には見えないものの、9項目が共通している。

むすび

以上のように『今昔物語集』の中の説話には、敦煌写本の「孔子項託相問書」の内容が投影されていることが見てとれる。このことから『今昔物語集』の撰者が目にしたものがこの敦煌本「孔子項託相問書」であったとは断定できないが、その内容を含んだ中国の文献が日本にも伝えられていたということは確かである。敦煌本「孔子項託相問書」には浄土寺の学生の題記(所謂「学郎題記」)を持つ鈔本があり、「孔子項託相問書」が当時の寺学で書写されていた⁷⁾。当時の敦煌の学校、とくに寺学は通俗文学作品を教材として用いることが多く、「孔子項託相問書」、面白い教材として利用されていたと考えられる。「孔子項託相問書」は敦煌地区のみならず、中央でも広く民間に流布した可能性があり、「孔子項託相問書」と題する文献は残されていないが、孔子と項託の問答とほとんど同じ内容が「小兒論」というタイトルで後世に伝えられ、明刊本「小兒論」が実際に存在している⁸⁾。また、満州文字とハングルを併記して書かれた「小兒論」も存在し、孔子と項託の問答は中国にとどまらず、周辺諸国にも伝えられていたのである⁹⁾。

このように、敦煌文書の存在によって、中国と日本の関わりがよりいっそう明らかになるのである。

注

- 1 この報告の内容は『〈対話と深化〉の新世代女性リーダーの育成、「魅力ある大学院教育」イニシアティブ、平成18年度活動報告書』2007, 3.
- 2 この関連は劉銘恕「斯坦因劫経録」(『敦煌遺書総目索引』商務院書館、1962、所載)に指摘されている。
- 3 『今昔物語集』の引用は、内容確認のための引用なので『新古典文学体系34 今昔物語集二』(小峯和明校注、岩波書店、1999)により、カタカナ表記を平仮名に改め、漢字部分も適宜平仮名表記にし、漢字の送り仮名も現代表記に改めて読みやすくしたものである。
- 4 『史記』巻71「樗里子甘茂列伝」に「大項襄生七歳為孔子師」とあり、劉向『新序』雜事第五「斉有閭邱邛年十八、道遮宣王曰、家貧親老、願得小仕。宣王曰、子年尚稚、未可也。閭邱邛対曰、不然。昔有顛項行年十二而治天下、秦項襄七歳為聖人師。由此觀之、邛不肖耳、年不稚矣」とあるなど、孔子と項託の伝承は多く見られる。項託の伝承については、張鴻勛「『孔子項託相問書』故事伝承研究」(『敦煌学輯刊』1986-1)に詳しい。
- 5 「孔子項託相問書」の鈔本は断片も含めて、スタン本はS395、1392、2941、5529、5530rv、5674の6点、ペリオ本はP3252、3306v、3754、3826v、3833、3882、3883の7点、ロシア本Ⅱ x 1356+2451、2352の3点の計16点ある。そのうち「孔子項託相問書」のタイトルのある鈔本はP3883、S1392、S2914、S5529で、P3833には「孔子項託相詩」、S5674には「孔子共項託」とある。漢文写本だけでなく、チベット文の写本も3点(S1724、P1902、Pt1284)ある。「孔子項託相問書」の研究として朱介凡「敦煌変文目録及『孔子項託相問書』」(『大陸雜誌』227、1961)、金岡照光「論敦煌本対話体文献」(『東洋学研究』11、1977)、張鴻勛氏が「敦煌本《孔子項託相問書》研究」(『敦煌研究』1985-2)、「《孔子項託相問書》故事伝承研究」(『敦煌学輯刊』1986-1)、鄭阿財「敦煌写本《孔子項託相問書初探》」(『法商学報』24、1990)などあり、本報告もそれらによるところが大きい。また、チベット本については馮燕「敦煌藏文本『孔丘項託相問書』考」(『青海民族学院報』1981-2)がある。
- 6 「孔子項託相問書」の引用はおおむね項楚書『敦煌変文選注(増訂本)』(中華書店、2006)によるが、各鈔本との照合により修正した部分もある。なお、項楚書はP3883を原巻としている。
- 7 S395に「孔子項託一卷」というタイトルのあとに「天福八年(943)癸卯十一月十日浄土寺学郎張延保記」とあり、P3833では「孔子項託相問書」の前に書写されている「王梵志詩」の題記に「丙申年二月拾九日蓮台寺学郎王和通写記」とあり、同じ筆跡で「孔子項託相詩一首」と首題があり「孔子項託相問書」の内容が続いて書写されている。

- 8 『敦煌変文集』（人民文学出版社、1957）所収「孔子項託相問書」の末尾には明万曆23年刊の「小兒論」と民国北京で活字印刷された「新編小兒難孔子」の内容が付録として載せてある。
- 9 関泳珪「満州字小兒論と敦煌の項託変文」（『李相佰博士回甲紀念論叢』ソウル、乙酉文化社、1964）によれば、満州字の小兒論は朝鮮の国家司訳院で刊行された満州語の学習のための教材のひとつであり、もともとは漢文の小兒論から女真語に翻訳したもので、それを満州字により改訳したものであるという。また、岸田文隆「清学書に現れた満州語ハングル表記について」（『言語学研究』8、1989）参照。

いとう みえこ／お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 准教授